

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 劉 喆

論 文 題 目

現代中国語における日系外来語の受容について

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 佐久間 淳一

委員 名古屋大学教授 大室 剛志

委員 名古屋大学教授 齋藤 文俊

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の概要】

論者は、本論文で、日本語から中国語に導入された外来語について、その受容の実態を論じている。

まず、第一章では、研究目的、研究方法とともに、先行研究に言及があり、また、日本語と中国語の交流関係について、古代から現代までの概略を解説している。論者は、日本語から入った外来語を収集するにあたり、各種外来語辞典の他、新聞、雑誌、インターネットにも当たっている。

第二章では、19世紀末から20世紀初めにかけて日本語から中国語に流入した外来語を扱う。明治維新後の日本では、西洋語から入った概念を表すために漢語が新たに作られたが、その中には、元々古代中国語にあった漢語が再利用されたものも少なくない。これを本論では「回帰詞」と呼び、古代中国語における意味と当該の時期に日本語から中国語に移入された際の意味との比較、および意味変化について考察した。

第三章では、1980年代以降の改革開放政策の下で日本語から中国語に移入された外来語を扱う。これらの外来語の中には、発音など形式面で元の日本語と異なるもの、また、意味の面で元の日本語と異なるものも含まれる。論者は、特に意味の異なる事例について、具体的な用法をもとに考察している。また、日本語から入った外来語が含んでいる接辞的要素が、中国語の中で生産性を持つ例もみられる。そのような、外来語の受容によって生じた現代中国語の語彙への影響についても論じている。

第四章では、インターネットの普及によって生じた、ネットを介して日本語から中国語に流入した最近の外来語を扱う。これらの外来語の具体例を検討するとともに、こうした外来語が受容されている背景についても論じている。

第五章では、ここまでの各章における考察を踏まえ、日本語から入った外来語が中国語に定着した原因について分析している。19世紀末から20世紀初めにかけての時期、西洋の事物、概念を表現するのに、中国語独自の単語で表すことも模索されたものの、翻訳家による造語より、日本語の単語の方が受容されたのは、日本で学んだ中国からの留学生が、日本語の単語を中国に持ち帰ったことに見られるように、当時の日中両国が置かれた歴史的状況が関係している。そもそも、日本語と中国語は、言語としては大きく異なるにもかかわらず、共に漢字を使用していて、漢語の造語法の面では共通点が多いことも受け入れを容易にした。さらに、日本語の単語の方が、複雑な概念でも一つの語で表せる傾向があり、「詞化程度」が高いという便利さも、日本語からの外来語の受容を促した。ちなみに、古代中国語の詞化程度は高く、日本で新たに作られた漢語が古代中国語を参照していることが、日本語からの外来語の詞化程度の高さにつながっている。

## 論文審査の結果の要旨

### [本論文の評価]

日本語と中国語は古くから交流関係があり、中国語から日本語に入った単語は日本語の語彙の大きな部分を占めている。それに対して、本論文が扱うような、日本語から中国語に入った単語も存在する。中国語から入った単語が漢語として日本語の一部となった以上、日本語から中国語に漢語が流入しても不思議なことではないが、外来語の受容に当たっては、受け入れ側の言語でなんらかの調整を行う必要があり、どんな単語でも受容されるわけではない。近代以降に日本語から中国語に流入した単語について、三つの時期に区分し、それぞれの時期における実例を収集して、中国語に受容された日本語からの外来語の実態を、受容に当たって中国語側で起こった調整の諸相を含めて明らかにしたことは高く評価できる。また、個々の単語が受容される背景は多様だとしても、日本語の単語が大きな抵抗なく中国語に受容されている理由について、多方面から検討し、一定の答えを導き出していることも評価できる。さらに、日本語から受け入れた外来語が含む造語成分が、中国語で独自に生産性を持って新たな単語を生み出していることを指摘している点も評価できる。

その一方で、各時期に流入した外来語として挙げられている例が、どのような手続きによって得られたものなのかについては必ずしも判然としない部分がある。また、「回帰詞」が受容されたのは、元々中国語に存在した単語だからだとしても、中国語の中でのその単語の来歴が示されなければ、本当に「回帰詞」と呼べるかどうかわからない。「詞化程度」に関しても、単音節語が主体だった古代中国語が二音節語を多く持つように変化したことは確かだとしても、そのことを、日本語からの単語の受容の理由と結びつけるには論証が不足している。

対象となる単語について、「回帰詞」については古典中国語における意味との違い、その他については日本語における意味との違いを考察している点は良いが、個々の単語の分析に関しては、若干疑問を感じる部分がないわけではない。また、日本語から流入した単語が含んでいる造語成分の生産性について論じている部分で、これらの造語成分が「虚化」しているとしているが、そのように述べることは適当とは言えない。

このように、細部においては、考察の不備や論述が不足している部分がないわけではないが、これらの瑕疵は、今後の研究の中で容易に正すことができるものであり、その一方で、日本語からの外来語に関する先行研究の多くが、近代における事象の研究に限定されている中、1980年代以降、そして最新の状況も含めて考察し、日本語からの外来語の受容を近代以来の一貫した流れの中に位置づけたことは、本論文の大きな功績と言える。

よって、審査委員一同、一致して、本論文が、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと判定した。